

英語リスニング・テストと文脈

English Listening Test and Contexts

長谷川 誠

Makoto HASEGAWA

0. はじめに

コミュニケーションの道具としての英語の必要性が増大するに伴って、英語の音声面を重視しようという動きが英語教育の中でよく見られるようになっていく。大学の英語テキストに、いわゆる「総合教材」が増え、大学の入学試験に、徐々にではあるが、リスニングのテストが組み込まれるようになり、それよりも一足早く、高等学校では、東京都や愛知県でも来年度の高校入試からリスニングのテストが実施されることで、北海道の一部を除き全国の公立高校でリスニングのテストが実施されることとなった。これにより、音声面の学習は受験勉強には関係ないということで軽く扱われる傾向に歯止めをかけ、さらには、大学を卒業しても簡単な英語も言えないし聞けない、というよく聞かれる英語教育批判に答えようとしている、といえよう。

このような音声重視の方向は、好ましいものではあるが、その効果の測定、つまり試験の方法になると、まだ手探りの部分が多いと言わざるをえない。それは、音声というものの取り扱いの難しさに由来するものである。

本稿では、英語リスニング・テストにおける、リス

ニング・テストと文脈の関係について、実験結果をもとに統計的に考察したい。

1. 音声に関するテスト

リスニング・テストが行われる以前に、音声に関するテストとして広く行われてきており、いまだに行われてもいる、いわゆる発音問題から始めよう。

英語を学習する上での音声の重要性の認識は、ここに至って始まったものではない。英語の試験には、発音問題と呼ばれるものがあり、それによって音声に関する力を測定しようとしていたのである。発音問題のよく見られる形式は、「下線部の発音が同じものを選びなさい」、あるいは、「最も強く発音する部分はどこか」というようなものである。

このような発音問題の例を、本年度のセンター試験から一つあげてみる。

I bought a house in the southern part of France for my cousin.

このような発音問題では、問題として出さる語がきわめて少数に限定されてしまう。そのような語は、試験対策用の単語集などでおなじみのものである。一例

を挙げると、busyがそのような語の一つになる。この語の場合には、綴りuの音が他の多くの同じ綴りの持つ音と違っているからである。一般的に発音問題として出題しうる語というのは、このように綴りと発音の結びつきが、その綴りの発音としては例外となるものであることが必要となる。出題の仕方は一通りではなく、表面的には様々なバリエーションを与えることが可能であるが、本質的には、「綴りと発音の結びつきが例外となるものを見つけないさい」という言葉に集約される。

また、このような発音問題では、日本人が実際に音声として発音したり聞き分けたりするのが苦手であることがよく知られている、lightとright、seeとsheを区別させるような問題は、それらの語の綴りの違いから一目瞭然であり、問題とする事すらできないのである。

この種の問題では、受験者が正解したとしても、そのこととその受験者が正しく発音したり聞き分けたりできることとは必ずしも結びつかない、という欠陥がある。音声についての知識と、実際に発音したり聞き分けたりする技能とは、必ずしも一致しないのである。

音声に関するテストを行う目的は、実際に音声としての英語を扱う技能を測定することではなくてはならない。発音問題には、上で見たように、出題しうる語がきわめて少数に限定されてしまう、つまり、偏ったごく一部のグループの発音に関する知識しか問題としえない、ということと、音声として発音したり聞き分けたりするのが難しい発音を実際に聞き分ける技能を測定することができない、という致命的な欠陥がある。

それにも拘わらず、今でも発音問題を積極的に望む声がある。そのような意見の多くは、単に、これまで行われてきているので受験生が慣れているから、あるいは、このような問題に慣れていることが受験勉強をしたことの一つの目安となるから、ということのようである。このような、実際の技能とは結びつかない単なる受験用の知識をいつまでも求めることは、学校英語への風当たりをますます強くすることにしかならないだろう。

2. リスニング・テスト

ペーパー・テストで行われる発音問題の限界を越えるには、実際に音声を使ったテストを行わなければならない。実際に音声を使って行われるテストがリスニング・テストである。リスニング・テストを、その測定しようとする内容から分類すると、音を聞き分ける

能力だけを他の能力とは切り離した形で測定しようとする聴取テストと、統合的な能力を測ろうとする聴解テストに分けられる。

リスニング・テストは、教育評価の本質的な役割としての診断的・形成的機能を持ち授業実践の中で行われ、結果の評定よりも過程の進捗を評価し、その結果を学習・指導へとフィードバックする事を目指す形成テストと、理想的には到達度テストであるべきであるが、同時に選抜テストでもなければならぬ入学試験では、当然その重点が変わらざるを得ない。形成テストでは、診断的・形成的な役割を果たすためには、できるだけ分析的な評価をすることが必要となる。そこで、正確な音の聞き取りを中心にして、そこから内容理解へと進むことになる。音の識別能力を伸ばすためには、minimal pairを用いた練習がよく知られているが、実施する上で信頼性と妥当性に関して問題があるが、それは、機器の利用によって解決しうる（長谷川 1996参照）。

これとは対照的に、入学試験で行われるリスニング・テストは、限られた時間の中で総合的な英語の到達度を測らねばならないので、個々の音の識別能力を測るのではなく、音声で与えられた問題を解決できるか、というような実際に使う能力を測ることを目指す。そういうわけで、入学試験のリスニング・テストは聴解力を測るものとなるはずである。実際に行われている入学試験のリスニング・テストを見ても、そのようになっているのが確認される。これをペーパー・テストで行われる発音問題と対比してみると、単に音声を使っているかどうかということだけでなく、測定しようとする対象までも変化するというおもしろい結果となっている。

3. 入学試験のリスニング・テスト

入学試験のリスニング・テストは、形成的・診断的なリスニング・テストとは、重点の置き方が異なるものではあるが、全く別物というわけではないのは言うまでもない。形成的・診断的リスニング・テストは単技能を指向し、入学試験のリスニング・テストは総合力・複合力を指向するという違いはあっても、その両者の接点があるはずである。その接点を探すべく、実際に行われた入学試験のリスニング・テストを検討してみよう。

リスニング・テストは、問題となる英文を音声で与えるという点ではすべて一致するが、その後については様々な工夫が見られる。それらをおおざっぱに、絵・

図・表を使うもの、問題となる英文と質問は音声によって与えられるが選択肢は英文で書かれているもの、質問が音声でなされその答えを自分で書くもの、文字で書かれている文章の空欄を聞き取って書くもの、ディクテーション、問題となる英文も質問も選択肢もすべて音声で与えられるもの、の6つに分類してみる。

平成7年度の公立高校入試のヒアリング問題では、33校の内、絵・図・表を使うもの22校、選択肢は書かれているもの18校、答えを自分で書くもの3校、文字で書かれている文章の空欄を聞き取って書くもの2校、ディクテーション1校、音声のみによるもの6校であった(1校でヒアリング問題を複数の形式で出題しているところもあるので、合計は33校にはならない)。平成8年度の国立大学入試リスニング問題では、9大学の内(前期・後期日程のものは別に扱った)、絵・図・表を使うもの0校、選択肢は書かれているもの5校、答えを自分で書くもの2校、文字で書かれている文章の空欄を聞き取って書くもの3校、ディクテーション3校、音声のみによるもの2校であった。

高校入試のヒアリング問題と大学入試のリスニング問題を比較すると、興味深い違いがある(用語の違いには、意味は無さそうであるが)。高校入試では33校の内22校も出題している、絵・図・表を使うものが大学の入試では1校も無い。これに対して、ディクテーションでは、高校入試では33校中1校にすぎないのに、大学入試では9校中3校であり、文字で書かれている文章の空欄を聞き取って書くものでは、高校入試では2校なのに対して、大学入試では3校であり、答えを自分で書くものが高校入試では3校に対して、大学入試では2校となっている。この3つを、英語を書き取らせるものとしてまとめると、高校入試では33校中6校なのに対して、大学入試では9校中8校という大きな違いとなる。

また、違いばかりではなく、似たところもある。それは、どちらも音声のみによる問題があり、それは、高校入試では6校、大学入試では2校と似た割合にもなっている。

高校入試のヒアリング問題と大学入試のリスニング問題を比較した結果を解釈してみると、次のようにまとめられそうである。どちらにも共通する傾向としては、ペーパー・テストとして行われた発音問題の欠陥を取り除こうとしている、というのが根底にあることがうかがわれる。その姿勢が最も明確に現れたのが、問題となる英文も質問も選択肢もすべて音声で与えられるという出題方法である。ここには、音声と文字、

技能と知識というギャップは存在しない。これが望ましい形であることには異論はあるまい。しかし、この形式の問題は、すべて答えの記号をを選択するという解答方法であった。そこで、記号問題の常として、偶然当たってしまうという可能性をいかに減らすか、ということが大きな問題となる。一部では選択肢が3つしかなかったが、大部分は選択肢を4つにすることでこの問題に対応していた。それで確率的な問題を一応クリアしたことはなるが、それは本質的な解決とはならない(長谷川 1996参照)。

確率的な誤差をなくすには、どのようにすればよいか、ということになるが、音声のテストであるということからすれば、音声を使って答えさせる、というのが最も趣旨に合っていると思われるが、實際上それは不可能だろう。そこで、他の媒体を利用せざるを得なくなる。そういうわけで、次善の策として、答えを他の媒体によって書かせる、ということになるのである。媒体として利用されるのは、絵・図、及び文字である。文字の利用法も、一つではない。一つは日本語の利用であり、これは性格的には絵・図と並べて考えるべきものと言える。もう一つは、目標言語である英語を使うもので、これは、音声と文字、聴覚と視覚、という媒体の違いが唯一の違いとなる。このような観点からの、他の媒体の利用ではあるが、実際の利用法を見ると、絵・図は、すべてが高校入試のヒアリングのみで利用されていて、大学入試のリスニングでは全く採用されていないが、その利用法は、絵・図を描かせる、というのではなく、正しいものを選択させるという形式であり、再び確率的な問題に舞い戻ってしまっている。

現在のところ、確率的な問題をさけるために実際に入試で使われているのは、文字を使って英文を書かせる方法だけであると言える。文字で書いて答えさせる方法は、ディクテーション、音声による英語での質問に対してその答えを書く、文字で書かれた文章の空欄を聞き取って埋めるという3つの形式が現在行われている。受験生にとっても採点者にとっても、ディクテーション、音声による英語での質問に対してその答えを書く、という方法は、負担が多く、実用性の観点からすると、文字で書かれた文章の空欄を聞き取って埋めるという方法が好ましいと思われる。そこで、この空欄を埋めるという方法について、これから実験をもとに考察することとする。

4. 文脈とリスニングについて

文字で書かれた文章の空欄を聞き取って埋めると

いう方法において、文字で与えられた文章の果たしている役割は何であろうか。それは、音声で与えられる文章の内のどの語(句)を聞き取るのかを示す、という役割ではないだろうか。そうだとすると、文字で与えられた文章がそれだけの役割しか果たしてないとは言いきれない。文章に空欄があるという形式の問題は、文法問題や読解問題でも見られる形式である。そこでは、音声なしに文脈のみで解答できる。例えば、柳井智彦(1996)が「弱形」聞き取りの問題としている、

- (1) He needs a car of () own.
- (2) What's () doing over there?
- (3) He told () to read it again.
- (4) I got a letter () them yesterday.

のような問題を、文字で与えて聞き取らせるとするのは、本当に聞き取りの問題と言えるのであろうか。ちょっとこつを教えれば、ふつうの学生は、(1)などは、音声など聞かなくてもhisと正解できるようになる。これほど極端ではないにしろ、このような出題形式での文脈の果たす役割に対してもっと研究する必要がある。

5. 実験とその結果

本研究では、基礎的な語の聞き取りに、音声のみで与えた文脈と音声と文字によって与えた文脈によって違いがあるかを調べた。聞き取りの被験者は、本校の1年生31人、2年生37人、3年生33人、4年生32人である。聞き取りの対象となる語は、中学校の必修語を中心に選定した。それを一覧表にすると次のようになる。

中学の必修語 (32語)

as, bad, books, box, but, called, class, clean, cold, grass, green, hard, know, light, long, many, money, no, now, right, see, she, sing, so, than, then, three, them, think, tree, us, wrong

必修語ではないがすべての教科書に出ているもの (3語)

heard, saw, thing

必修語ではないが本校で既習のもの (2語)

grass, lies

音声のみの文脈と音声と文字による文脈とが聞き取りに及ぼす効果を調べるための実験のとして、音声のみの文脈の場合も音声と文字による文脈の場合もどちらの場合も、後ろに資料としてつけてある同一の英文を使った。音声のみの文脈の場合、次のように行われた。被験者は、例えば、Of course, there are no

dinosaurs on the earth now. という英文を2回聞かされ、次に、no dinosaurs on the earth now という部分を聞かされる。そうすると、3回目に聞いた最初の語を、番号だけが書かれた解答用紙に書き取る。

音声と文字による文脈の場合は、被験者は、空欄のある英文の書かれた解答用紙を渡され、一通りその英文に目を通してから、音声によって与えられる文を聞き空欄に当たる語をそこに書き入れる。

音声のみの文脈の場合の試験を最初に行い、一週間あいだをあけてから音声と文字による文脈の場合の試験を行った。1、3、4年生についてはLLを使用して行ったが、2年生についてはLL教室が一つしか無く、他のクラスの授業と重なったためLL教室が使えなかったため、やむなく教室でテープ・レコーダを使って実施した。

結果は、次の通りであった。

1年生

音声のみ	平均点	12.94
音声と文字	平均点	29.06

2年生

音声のみ	平均点	11.76
音声と文字	平均点	21.84

3年生

音声のみ	平均点	17.39
音声と文字	平均点	36.03

4年生

音声のみ	平均点	18.25
音声と文字	平均点	34.13

2年生の平均点が、どちらも最低となったが、教室でテープ・レコーダを使用しているので、LL機器を使用して行った他の学年とは条件が異なるので、そのことが影響しているのかもしれない。しかし、2回の実験は、各学年ともそれぞれ同一の条件の下で行われているので、このことが後の処理に影響することはない。

6. 考 察

本研究では、同一の問題の聞き取りテストを、音声のみの文脈を与える場合と音声と文字の文脈を与える場合の2つの場合で行った。音声と文字という入力刺激の違いによって生じる差が少なければ少ないほど、両者の得点は近づき、差がなければ同点となるはずである。

実験の結果は、各学年とも、音声と文字で文脈を与える方が、平均点がずっと高くなっている。その差は、

1年生では2.25倍、2年生では1.86倍、3年生では2.07倍、4年生では1.87倍となっている。この結果からすると、音声のみではなく音声と文字を与えた方が聞き取りやすくなる、となりそうである。

しかし、速断は禁物である。この両者の相関の程度を調べる必要がある。相関係数 r は、1年生では0.56、2年生では0.38、3年生では0.68、4年生では0.59となった。相関係数の解釈は、0.20以下は「ほとんど相関なし」、0.20～0.40は「低い相関がある」、0.40～0.70は「かなり相関がある」、0.70～0.90は「高い相関がある」、0.90～1.00は「非常に高い相関がある」とされている。1, 3, 4年でも「かなり相関がある」レベルであり、2年生に至っては、「低い相関がある」程度にすぎない。

今回の実験が全く同一の問題を使って、全く同一の被験者に対して行われたことを考慮に入れると、限りなく1.00に近い値が期待される。それにも拘わらず、「高い相関がある」のレベルにも達しないという結果は、音声と文字を使って行われる聞き取りテストは、音声を扱う能力を測定するテストとしては、信頼性に問題があると言えよう。

7. おわりに

英語学習・指導上、音声の重要性は、誰もが認めるところではあるが、音声学習を実際に指導し、評価しようとする、いまだ手探り状態である。音声に関するテストは、発音問題からリスニング・テストへと、より妥当性を追求し改善・工夫がなされているが、まだまだ基本的なことで不明なことが多く存在する。授業で音声指導がきちんと行われる環境を作り出すには、入試の音声に関するテストが、音声を実際に使う能力を正しく評価することが必要である。そのときに初めて、positiveなWashbackが期待できるようになるのである。そのようなテストの開発がいま最も必要とされている。本研究がそのための一助となれば幸いである。

資 料

1. Some were very large and were 30 meters (long).
2. Of course, there are (no) dinosaurs on the earth now.
3. There was silence. (Then), he heard the voices again.
4. The guest had heard these voices too (many) times, and now he was afraid .
5. While he was there, he (heard) the voices, too.
6. Last week, Ken's English teacher told the (class) that there would be a small test the following week.
7. I couldn't even (light) a fire in my cabin.
8. (Now) he had only one day to study.
9. He went downstairs to watch TV. (Then) he stayed up late and read some comics before he finally went to bed.
10. Although he had studied so (hard) the night before, he only remembered eight words out of the twenty.
11. It was a (cold) January morning in 1982.
12. The snow that started to fall the night before had not yet stopped, and at half past six it was not yet (light) outside.
13. The seeing eye dog was keeping a slower pace (than) usual.
14. Why did Serve pull her master (so) suddenly and make him fall to the ground?
15. You will soon see a big red sign on your (right).
16. She had saved her master, and (she) herself had been hit by the speeding car.
17. You saved my life and (now) you are going to lose one of your legs.
18. It's a tree that stays (green) in the winter. It can live even in very cold weather.
19. One day a poor woman asked Dr. Goldsmith to come and (see) her husband, who was sick and could not eat.
20. Do you (think) about the meaning of your name?

21. Why did he (sing) "Imagine"?
22. Peace-loving young people (called) "hippies" were against the Vietnam War.
23. One day I was out hunting, and I saw a racoon up in a (tree).
24. Heroes leave behind a "(grass) roots history" in simple words and melodies.
25. You have no (right) to sit on the bench.
26. Goldsmith gave her a little paper (box) that was very heavy.
27. I'm sorry, but you're on the (wrong) seat.
28. He felt a dull pain as a (hard) fist hit him in the stomach.
29. It was (no) use fighting any longer.
30. Goldsmith had given them all the ready (money) that he had.
31. Haven't we seen (them) somewhere before?
32. When he (saw) me, he asked, "Is your name Davy Crockett?"
33. Mr. Kameyama didn't (know) this, for he was blind.
34. The banks shut at (three).
35. The black cat was so shocked that it turned around quickly and ran away as fast (as) it could.
36. The faithful dog had never done such a (thing) before.
37. Make each one a little larger (than) the pie dish.
38. Use your finger or a brush and wet the outside edge of the bottom crust with (cold) water.
39. We (no) longer need these clothes, but I just can't throw them away.
40. (As) a token of our thanks we are sending these packages to people in the Sahara.

41. A mad dog has bitten my friend Henri, and (now) they are burning him with red-hot irons.
42. If he catches it, (no) one will be able to cure him.
43. His father worked (hard) to send his son to school.
44. Everyone knew that meat went (bad) if it was left in the open air.
45. I think microbes come, not from bad foods, (but) from the dust that floats in the air.
46. The meat juice in (them) still hasn't gone bad, after more than a hundred years.
47. This research made possible the tinned and bottled foods we (know) today.
48. He realized that it was something too small to see and (called) it a 'virus'.
49. At last in 1964, people started an earnest campaign to (clean) the river.
50. They tell (us) about a small person.
51. When he was a young man, he (saw) Ben Pollack, a famous band leader.
52. Britain (lies) far to the north.
53. I usually cover the (books) with paper.
54. The earth and the sun had frozen and couldn't move, and that was why the sun couldn't (rise).

参考文献

(財)日本英語検定協会編

「英検&入試情報ガイド～高校入試ヒアリング
問題と英検リスニング問題の類似性について」
(1995)

「英検&入試情報ガイド～大学入試リスニング
問題と英検リスニング問題の類似性について」
(1996)

長谷川 誠

「英語リスニングテストについて」

『小山工業高等専門学校 研究紀要 第28号』

(1996)

柳井 智彦

「聴解の困難点とその対策」

『英語教育』 Vol.45. No.4. 大修館 (1996)

(受理年月日 1996年 9 月30日)